

2025. 7 岡村昭彦の会 NO. 35

日本におけるバイオエシックスの展開と未来 ～岡村昭彦のメッセージ

バイオエシックス研究者 木村利人

第40回AKIHIKOの会開催



講演では冒頭に40年前の青山葬儀所における岡村昭彦の葬儀の映像から、昭彦の家族の紹介と木村さんの弔辞の部分が紹介されました。

お話は60年代のタイ、ベトナムでの岡村さんとの出会い、その後の家族ぐるみの交流と勉強会、80年代の岡村さんと木村さんによる日本におけるバイオエシックスの展開におよびました。

また岡村昭彦集6『ホスピスへの遠い道』について、難しすぎて、何を言おうとしているのかよく分からないという読者の声に対して、「補遺『ホスピスへの遠い道』からの出発」を資料として配り、豊かな想像力に支えられた彼の「ひらめき」は、人には見えな

いイメージを見ることができた、と回答。

最後に故・坂本九さんが歌ってヒットした『幸せなら手をたたこう』が、実は木村さんが大学生時代に、フィリピンYMCAのワークキャンプでの体験をもとに作詞した歌であること、その経緯と歌詞の意味について語られました。

力強い迫力ある話ぶり、質問への明快な解答など91歳とは思えない講演は参加者に感銘を与えました。懇親会はビストロ・ククに会場を移して、和やかな内にお開きとなりました。

講演会参加者41名、録画視聴者20名、懇親会参加者25名。

第40回AKIHIKOの会は2025年3月22日(土)14時から日本出版クラブ会議室(東京都千代田区神田神保町)において、岡村昭彦のタイ、ベトナム時代からの盟友で、国際的なバイオエシックス研究者の木村利人氏を講師としてお迎えして開催されました。

木村さんは早稲田大学名誉教授で、恵泉女学園大学元学長。博士。バイオエシックスのバイオニアとして、約40年以上にわたり、研究と教育に従事してこられました。

現在、国際バイオエシックス学会設立理事、日本生命倫理学会元代表理事・第7期会長。

木村 最初に、今から四十年前の極めて貴重な映像を皆さんにご覧いただきます。（＊）

〈＊映像『さようなら岡村昭彦』故岡村昭彦葬儀告別式東京・於・青山葬儀場 一九八六・三・三一〉

ナレーション これから遺族たちの腕に抱かれて入場してまいります。その胸に抱かれた遺骨は、あの薩摩焼の名工第十四代沈壽官氏によって焼かれた壺に納められています。

では、はじめにご遺族を紹介させていただきます。喪主の岡村加久子さん。岡村アキヒコくん。岡村純子さん。岡村聡さん。岡村ノブコさん。岡村クスマさん。岡村アイコさん。そして、岡村昭彦の弟にあたりますが、岡村春彦です。私は司会をいたします、大住敏子です。次に弔辞をジョージタウン大学教授の木村利人さん、お願いいたします。実は木村利人さんはお仕事の都合で、奥さまの恵子さまがワシントンから駆けつけてくださいました。

（木村恵子弔辞代読）「岡村さん。私たちは岡村昭彦さんという心の支柱を失い深い悲しみのうちにあります。あなたが亡くなられましたことを以前活躍しておられましたアメリカの『LIFE』誌に連絡しましたところ、次のようなあ

なたのお仕事を高く評価したメモが残っていることを知りました。これは写真部のドン・ベイリー氏が編集長のラリー・フリードマン氏に宛てたメモです。

『岡村は今まで私が出会った中の最も優れた写真家である。彼は一方的に与えられた課題をすることはまずないが、常に自分の才能に応じたストーリーを自らに課している。彼自身は平和主義者であるが、彼の仕事はベトナム、ラオス、北アイルランド、ビアフラと、いつも戦争を追っている。何カ月もの間、私たちは岡村がどこにいるのか、何をやっているのか、見当もつかない。しかし、一九七〇年六月には、ビアフラ前線での取材を終え、ひよっこリニューヨークに現れた。このフリーランスカメラマンが次に考えている危険を伴う仕事に対し、私は彼を信用し、何も問わず、ベトナム行きの運賃と、わずかな補償を前金で払った。その次、出会った時、彼はラオス侵略を取材した世界で唯一のジャーナリストになっていた』

このメモを読むと、岡村さんがこのラオス戦線から戻られたその日に、ひよっこりとサイゴンの私たちの家にあの笑顔で現れた時のことがついこの間のことのように思い出されます。

一九六五年にバンコクでお会いして以来の私たちとの関係を、監訳された『ホスピス』（＊）のあとがきにこう書かれていらつしやいますね。（＊『ホスピス』末期ガン患者への宣告』ビクター&ローズマリー・ソルザ著・木村恵子訳 家の光協会、一九八一年刊）

『木村夫妻と私は奇妙な人間距離を保ちながら、あるときはアフリカとジュネーブ大学で、あるときは日本で、あるいはハーバード大学で、そして現在のジョージタウン大学へと、私たちが行く地球のあちこちを結び、人間の絆は伸びたり縮んだりして、続いてきました』

また、最近には日本にバイオエシックスを根づかせようと共に仕事をしてきました。これからますます岡村さんの存在と発言が重要な意味を持つてきている矢先、突如、この世を去られたことは、私たちにとり痛恨の極みです。岡村さんと共に切り開いてきた日本のバイオエシックスを大きく未来に向け展開されることが残されたおまえたちの仕事なんだぞと、あの鋭い優しい目で語りかけてくださっているように思えてなりません。私たちはこれからも岡村さんの切り開かれた道を歩み続けますので、どうぞ私たちの未来の歩みの中にいつまでも生き続けてく

ださい。岡村さんに連なるご家族、ご親族の皆さまにお慰めと平安がありますよう心からお祈り申し上げます。一九八五年三月三十一日木村利人、木村恵子」。



初めて出会ったのはバンコク

木村 あれから四十年が過ぎたのです。今日まで四十年続いたAKIHIKOの会で、岡村さんに深く関わりのあった方々と一緒にこのような会が開催されることは本当にうれしいことです。

映像のはじめに、岡村さんの活動の展開と深く関わりがあつて、亡くなられた大住敏子さんとか、岡村さんの親友だった延島建市先生も映っておられましたけども、岡村春彦さんも故人となられました。そうした方々を思いつつ、しばらく黙とうをしたいと思います。

「黙とう」

どうもありがとうございました。ともかく、このように着実に続けてこられたAKIHIKOの会の世話人の戸田さんはじめ、会員や関係者の皆さん方に心からお礼を申し上げたいと思います。

私が初めて岡村さんに会ったのはバンコクで、今年は六十年になります。ただ、行動とともにした期間は、ほぼ二十年なのです。私たちとの出会いを岡村さんがどう捉えていたかというこ

とを、持ってきた本や資料を読みながらお話ししていきたいと思っています。

今日の会は岡村さんと一緒にバイオエシックスの講演会を日本中でやった時と同じスタイルなのです。当時はもちろん、パワーポイントもありませんし、こうしたペットボトルに入った水やお茶もなくて、急須に入れたお茶が出てきたのです。今日はその時のことを思い出しながら同じスタイルでやりたいと思います。

先ほどの映像の弔辞の中で紹介した『ホスピス A Way to Die』という本を岡村さんが「どうしてもこれは日本に紹介する必要がある」というので、翻訳を恵子に依頼して、監訳者あとがきを岡村さんがお書きになったのです。その中でこう書いています。

「ながい間、南ヴェトナム戦争の報道にたずさわってきた私が、いま一人の訳者、木村恵子さんと二人でこの本の翻訳と取り組むようになったのは、もとを正せば、ご主人の木村利人君（現在、アメリカのワシントンDCにあるジョージタウン大学付属・ケネディ研究所バイオエシックス・センター教授）と私が東南アジアのバンコックで短い会話を交わしたことにあります。一九六五年のことでした。そのとき、私はPANA通信社の契約特派員としてサイゴンに

いたのですが、バンコック空港を訪れた時、タイの日本人会の招きに応じ、日本人倶楽部で在留邦人のために、南ヴェトナムで行われている戦争について小さな講演会を持ちました。その時、恵子さんの未来のご主人に出会ったのです。これは私のことです。



「たしか彼は、タイ国立チュラロンコン大学と、

同じ国立のタマサート大学の二つを兼任する客員教授として赴任してきたばかりだったと記憶しています。二度目に彼に出会ったのは、それから五年後の一九七〇年で、今度はサイゴンにある日本大使館の二階に上がる階段の途中でした」。

岡村さんは階段を上がってきたのです。私は下っていき、途中で出会って、お互いにアツと言って立ち止まったのです。

「私はそのとき、五年間にわたる入国禁止が解け、古巣の南ヴェトナムに戻ってきたばかりで、米軍が発行する記者証に必要な国籍証明を大使館にもらいに来たところでした。木村君は2階から駆け下りてきて、私と階段の途中で立ち話になりました。」「彼は、法律家である彼の専門の一つである比較法学の立場から、サイゴン政権の行っている軍事裁判を研究しているとのことでした。そして、奥さんと幼いお嬢ちゃんを連れて来ているので、ぜひ、一度、遊びに来てくれ』と言うのです。木村君と夫人は敬虔なプロテスタントでした」。

先ほどの映像の弔辞でも述べましたが、「木村夫妻と私は奇妙な人間距離を保ちながら、あるときはアフリカとジュネーブ大学で、あるときは日本で、あるいはハーバード大学で、そして現在のジョージタウン大学へと、私たちが行く

地球のあちこちを結び、人間の絆は伸びたり縮んだりして、続いてきました。」と述べ、その後の展開として、こういうことが書いてあります。

「私は二年間にわたったビアフラ独立戦争を取材した時の失敗の体験を中心に、西アフリカを舞台にして展開した、生きた世界史を木村夫妻に語り続けました。授業は、私がちよくちよく戦場に行くために中断しましたが、サイゴンに生きて帰り着くと、泥まみれの軍服を脱ぎ捨て、もうその晩には、私たちの授業は再開しました」。

戦場から帰ってきた、そのくたびれた体で本と一緒に読んでいたのです。「さあ、続きをやるう」といつて続きをやったのです。

「私たちはベトナム植民地支配史を深く掘り下げるために、白人のアフリカ支配にメスを入れながら、へわれわれは今、どんな時代に生きているのか？を真剣に語り合い、生命操作が可能になった新しい時代のヴェトナム戦争に、あらゆる角度から光を当てることを急ぎました」と書いてあります。

岡村さんは記憶力が抜群です。これは後に書かれた文章ですけども……。

「人権論を専攻する木村利人君の関心はアメリカの枯れ葉作戦に向けられ、投下された膨大な量のオレンジ剤などの農薬の本当の使用目的

は、ベトナム人の遺伝子を直撃し、『ジェノサイド』してしまうことにあるのではないか。』

ジェノサイドの「geno」には民族・遺伝子という意味、サイドは殺すという意味ですので、要するに民族大虐殺なのです。「そういう人類最初の戦争ではないかと木村君は疑い始めていたのです。その後、木村君はジュネーブ大学で人権論を講義しながら、この枯れ葉作戦の問題を取り上げ、やがてハーバード大学でバイオエシックス（生命倫理）という新しい生命操作時代に生まれた学問と取り組み、とうとうジョージタウン大学のケネディ研究所内にある世界最大のバイオエシックス・センターの教授として活躍することになります」と書いています。私は、タイ、ベトナム、スイス、アメリカに住んで各国での大学や研究機関で研究や教育して来ましたが、岡村さんが書かれておられるように世界の各地で岡村さんと出会い、学び続けてきたのでした。

そういう私の生き方から振り返って見ると、今年は大事な節目の年でもあります。戦後は八十年です。そしてベトナム戦争が終わって五十年。私が一九六五年五月一五日にタイに着任してから六十年。

このような、意味ある節目の年に、単に岡村さんのことを回想するだけではなくて、岡村さ

んと何を話し合ったのか、岡村さんとの話し合いの中で何を学び、どのように現在に至る当時の未来へと前進してきたかという過去から、現在、そして更なる未来を展望するお話をしてみたいと思います。

戦闘の間三日間続けて勉強会

岡村さんと最初にバンコクでお会いした時は、岡村さんは講演する人、僕は聴いている人という関係でした。岡村さんから見ると、私に大した印象はなかったと思うのです。あとから考えてみると「ああ、あれが君だったのか」という程度のことだったと思うのです。

講演会のあと、私が友人と待ち合わせるためバンコクの中央郵便局のそばにあるビクトリーホテルで待っていたら、そこに岡村さんが現れたのです。ビクトリーホテルは、現在はありません。これは中国語で「勝利飯店」です。当時ベトナムを取材中のジャーナリストたちがサイゴンで疲れた体を休めるためのバンコクのホテルでした。私は友人と会い、すでに用事は済んでいましたが、そこで偶然、また岡村さんにお会いしたのです。

その後、サイゴンで再会するわけです。岡村さんが家に来ることはわかっていましたから、

マンションの四階に我が家があったので、私は下の入り口に降りて岡村さんを待っていて、恵子が四階の玄関にいた時、岡村さんがやってきたのです。私が驚いたのは、岡村さんが、周りに注意を払いながらゆっくりと慎重に階段を上がって行くそのスタイルでした。



あとで聞いた話ですが、岡村さんの宿舎の部

屋の前には時々、粉がまかれていたそうです。その粉で足跡を確認して、「ああ、今日、誰かが来ている。私を殺しに来た奴かもしれない」そう思いながらベッドで眠られたというようなこともあったことでした。

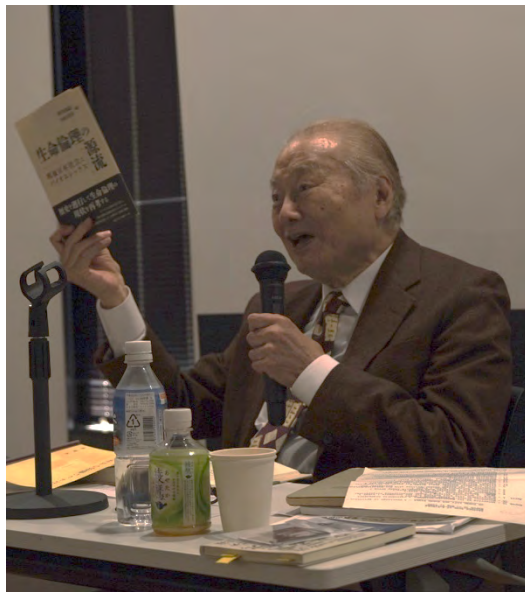
岡村さんが静かにゆっくりと登場したサイゴンでの第一日は、戦場から帰ってきたばかりの汗まみれの軍服で、私たちの夕ご飯を本当においしそうに食べていただいて、いろんな雑談というか、自分自身のことを語っていききました。「自分はどうして今ここにいるのか」ということを語ってくださいました。

岡村さんはそれから三日間続けて、わが家に夕食を食べに来ました。ちょうど戦闘の間でひと休みしていたわけなのでしょうね。

岡村さんは、私たちには想像もできないさまざまなことを語ってくれましたが、一番印象に残っているのは、戦争が終わった時。私は十一歳で八月一五日の玉音放送を集団疎開していたお寺で聞いたわけですが、岡村さんは十六歳。私より五つ上ですから、岡村さんが体験した話のショックは大きかったですね。十六歳と十一歳は大きい差があるのです。

先ほどの映像にもありましたが、既に岡村さんは、戦時中にイタリアのファシスト政権が倒れてムッソリーニが絞首刑になって民衆によつ

てつるし上げられている『L I F E』の写真を高松という先生の家で見っていたのです。十六歳の若い青年には、日本が負けることが分かっていたのです。僕たちは、最後の最後まで日本は勝つと信じていました。天皇陛下を中心にした体制の中で、神国日本不滅、神州不滅、どんなことがあっても最後まで戦う。子どもですけど、竹やりを持って死ぬ覚悟でいたのです。



山梨県は空襲に東京へ向かう飛行機が銀翼連ねて通っていく空路でした。飛行機が墜落したら、アメリカ人を殺してしまえと言っていました。鬼畜英米でしたからね。これは本当に恐ろしい洗脳です。兵隊を殺せというのではないのです。子どもだろうが、女性だろうが、兵隊だ

ろうが、民間人だろうが、とにかく敵国人を殺せという教育ですからね。

岡村さんはおそらく、ムッソリーニの絞首刑の写真を見て、もうじき戦争が終わると見て、備えていたのだと思います。

当時私は大日本帝国の必勝を信じていて、そして、軍隊が日本国民を守ってくれると固く信じていました。しかしあとから聞くと、満州国、中国の東北部から一番最初に逃げたのは軍隊で、飛行機に乗ったまま逃げてしまったのです。私の知っている航空士官は、八月十五日に突撃の命令が出た。だけど何かおかしいと思って電波の状況を見ると「空港に戻れ」と出ている。それで空港まで戻ると、下にソビエト軍旗が見えたので、その場で決断し、回れ右して別の空港に一旦降り、給油して、そのまま飛行機で日本に帰ってきたそうです。

満州の軍隊は日本の人たちを守らなかったし、沖縄では日本人を殺しましたよね。洞窟にみんなが逃げ込んで避難している時、子どもの声がうるさいって言って殺したでしょ。そして東京の市民には、「家は絶対に大丈夫、帝都を守る」と言いながら、子どもたちがいたら邪魔だから、どかしてしまったのです。

いいですか。子どもたちを守るといっているのでは

ない。邪魔だから疎開させたわけでしょ。沖縄、広島、長崎。大日本帝国が国民を守るといつて嘘をついたことは、これはもう永遠に消えません。軍隊というのは嘘をつきます。国民の命を守りませんよ。岡村さんもそういうことを身にしみて感じていたのではないのでしょうか。

戦後、私は家が焼けて帰る所がなくなったので、やむを得ず千葉の伯父のうちに رفتり、私の父が勤めていた有楽町にあった電気研究所の実験室の机の上に布団を敷いて寝たりする生活がきました。

中学生の時に、私は文部省教科書の『あたらしい憲法のはなし』（一九四七年八月二日・発行）年を勉強しました。この教科書を習った世代は二、三年ぐらいしかなくて、岡村さんは習っていないと思います。私は憲法を勉強した数少ない中学生の一人なのです。私が一番感動した個所は「戦争の放棄」という箇所でした。こう書いてあります。

「みなさんの中には、今度の戦争に、おとうさんやにいさんを送りだされた人も多いでしょう。ごぶじにおかえりになったのでしょうか。それともとうとうおかえりにならなかったのでしょうか。また、くうしゅうで、家やうちの人を、なくされた人も多いでしょう。いまやっと戦争はおわりました。二度とこんなおそろしい、か

なしい思いをしたくないと思いませんか。こんな戦争をして、日本の国はどんな利益があったのでしょうか。何にもありません。ただ、おそろしい、かなしいことが、たくさんおこっただけではありませんか。戦争は人間をほろぼすことです。世の中のよいものをこわすことです。だから、今度の戦争をしかけた国には、大きな責任があるといわなければなりません」。

これはドイツであり、日本ですね。イタリアもそうです。

「このまえの世界戦争のあとでも、もう戦争は二度とやるまいと、多くの国々ではいろいろ考えましたが、またこんな大戦争をおこしてしまったのは、まことに残念なことではありませんか」。

これが文部省検査済の教科書に書いてあるのです。

私はこれを読んで、そして先生から教えられて、新時代の国民として、これを守って生きなくては駄目だ、と思いました。

いいですか。戦争前に何を言っていたかという、軍隊は、「敵が攻めてきたら大変だから軍備を増やそう」と。軍備を増やした今の日本は安全ですか？ 全然、駄目でしょう。これから軍備を増やすのではなく、外交でなんとか平和を貫く精神を持ち続けていかないと駄目な時代

代なのです。

今、恐ろしい時代です。新聞の評論を見ても、中国、ロシア、北朝鮮からの侵攻に備えて軍備を増やせと。私たちが中学生の時に学んだ方向と真逆の方向に、いま日本は進んでいます。危ないです。戦前に戻っているというのが、少年時代の私の経験をベースにした体験です。

「皆さん、あの恐ろしい戦争が二度と起こらないように、また戦争を二度と起こさないようにしましょう」と文部省が言っているのですからね。その後二年ぐらいで警察予備隊ができて、そして、だんだん当時の精神が消えていくわけです。私は岡村さんと話をしながら、十六歳の岡村さんが本当に死ぬか生きるかの苦しい体験をしたのだなということを感じました。

「人間の思想は死ない」

この四十年間に私たちが知らなかった新しい岡村昭彦像がどんどん出てきました。研究も進みました。静岡県立大学附属図書館には岡村昭彦文庫もできました。いろんな研究資料も蓄積されているのです。私たちはこれからも岡村さんに学ぶべきことがいっぱいあるということを忘れないようにしなければいけないと思うのです。



岡村さんは「人間の思想は死なない」と言っているのです。岡村さんの見解によると、人間の思想は未来に向かって生きている。少なくとも三〇〇年前にさかのぼって考えて、三〇〇年ぐらい後にその思想がどうなるかを考えようじやないかと語り、書き残しました。岡村さんの思想というのは、私は日本の文化の中で非常にユニークだと思っていますので、これから三〇〇年ぐらいは岡村さんについて語り続ける方々は消えていきかない、と思っています。

憲法は一九四六年十一月三日公布で、施行が四七年の五月三日なのですけども、ともかく私たちは戦争をしないで今日まで来たわけですね。岡村さんは戦場で「本当に平和に生きるということはどういうことか」を思いつつ、戦場からわが家に帰ってきて、「わが家に戻って」というのもおかしいですけども、ほっとした顔でお茶を飲んで、食事をして、そして勉強して……。勉強ですよ、勉強しに帰ってくるわけですね。そのテーマが「私たちはどう生きるか」でした。岡村さんはそういう意味では、何というのか、人生への愛のパトス、愛の情熱というか、それを持った人ですね。

関連する話になりますが、ある時、岡村さんが来るっていうので、わが家では家内が台所でいろいろ準備していて、コーヒーカーップにお湯が入れてあったのです。そこへ長女のエリがやって来て、下からそのコップを触ったのです。岡村さんが来る寸前です。そしたら熱湯が胸にかかって、エリが「ぎゃあ」って泣いたのです。ちやうど岡村さんが玄関から入ってきた時、エリが泣いていたのです。私が「岡村さん、うちの娘が熱湯かぶってやけどしたみたい」というと、「あ？ ちよっと待っててね」と言っ、そのままどこかへ行ってしまったのです。

当時、アメリカで特産品として販売されていた、戦場には絶対に必要なやけどの治療薬だったのです。それを持ってきた。その時の岡村さんの迅速な行動には、本当に私は涙が出るくらい嬉しかったのです。思ったらすぐ態度に示すのが岡村さんですね。

この間、久しぶりにその長女が帰国してきたものですから、「その後、どうなったの？」と聞くと「全く痕がない」って言っていました。あの薬が効いたのですね。やけどの特効薬っていうのは戦場では必需品です。弾丸に当たったり、かすったりする時に絶対必要なのですね。そういう岡村さんのいわば命へのこだわりと、それから、優しい愛の心を直ちに実践するスタイル、これはなかなか普通の人にはまねできないけども、しかし、私はそれを岡村さんに感じました。

岡村さんの中にある「Bios（ビオス）」、バイオエシックスのBiosは「いのち」という意味です。すけども、そのBiosと、岡村さんの中にある「ああ、大変だ。この薬をつけなくちゃ」という、いわば「Pathos（パトス）」。そのためにすぐに行動に移すという態度ですね。行動というのはアクションですが、アクションの中で岡村さんはいつも全力を尽くして仕事をしていたのです。ベトナムでは岡村さんと勉強もしましたが、それだけでなく、ブントウというサイゴン（＊

現ホーチミン）に近い海岸にも行きました。日本でいうと葉山のようなところで、海水浴場があるのです。岡村さんの肩車でうちの娘は海の中まで行ったりしていました。このブンタウへ車で行く途中にも地雷があつたりして、本当は危ないのです。でも、そこに行った時の思い出の写真も残っています。

私はベトナムに一九七二年までいて、そのあとスイスのジュネーブにあるエキュメニカル研究所に赴任しました。私はクリスチャンですが、世界教会協議会という国際的な組織がエキュメニカル研究所を持っていて、ジュネーブ大学と連携した大学院を設置していました。私はそこで人権論と医療とベトナムでの体験を踏まえた戦争と平和について講義をし、ゼミをする機会が与えられました。

このジュネーブでの三年間にも、岡村さんは訪れてくれました。「何をやっているの？ どういうテーマなの？」と一生懸命聞いてくれました。

ジュネーブの後、一九七六年から二年間は日本に帰りまして、早稲田大学法学部と国際部で日本で最初のバイオエシックスの講義とセミナーを始めました。

一九七八年から、今度は再びハーバード大学に行くことになるわけですけども、当時ハーバ

ード大学などでのバイオエシックスの大きな展開が、アメリカを中心に起こっていました。

アメリカでのバイオエシックスのセミナーに参加して私が驚いたのは、何だと思えますか、皆さん。

「いのち」の問題についての「バイオエシックスと公共政策」というメリーランド大学公共政策センターで開催されたセミナーに参加した時のことです。その時の基調講演者がベトナムの前・地方平定司令官で、後にCIAの長官になったウィリアム・コルビーという人だったので驚きました。

「人権といのちの公共政策」の問題を真剣に考えようとする会議でしたが、参加者のかなり多くの人たちはベトナム帰還兵だったり、南部での人権運動のリーダーだったりしたのです。これは岡村さんも書いていますけども、セント・エリザベス病院（ワシントンDC）にはベトナム帰還兵がかなり多くいたのです。ベトナム戦争は世界の歴史を変えましたが、同時にアメリカの歴史をも変え、人権と平等に大きな影響を与えました。健康と、後遺症の回復のためのさまざまな工夫がこらされ、患者が施設に閉じ込められない、オープンにしてコミュニティに戻るといふアイデアがベトナム戦争を契機に大きく広がったのです。



「バイオエシックスとベトナム戦争とどう関わり合いがあるの？」って、皆さんも疑問に思われるでしょうけど、実はベトナム戦争の与えた大きな心の傷が良識あるアメリカ人の中に残っていて、それが人権と平等、そして多様性の展開の中に生かされてきたのです。このところ、トランプ大統領が全部ひっくり返していま

すが、これは絶対に長く続かないと思います。アメリカの憲法に沿った民主主義の伝統の中で、トランプ大統領の手法は極めて異常ですので、彼のやっていることは間もなく大きな破綻が来るように思います。



バイオエシックスとベトナム戦争とは深い関わりがあつて、実は私が唱えたバイオエシク

スの根底にある「シビックアクション」、市民活動としてのバイオエシックスのルーツはベトナム戦争との関わりで出てきたのです。徴兵反対。侵略反対。植民地主義反対。性的平等。そういうダイバーシティの展開と実現でした。私が出席しておりましたアメリカのキリスト教会では、ベトナムの難民を受け入れ、職を探して、アメリカ人になる手助けをするプログラムを展開していました。

その頃岡村さんがハーバードの私のところに来られました。当時、岡村さんは、浜名湖の下水道終末処理場建設反対運動を漁民と一緒に闘っていたのです。浜名湖は牡蠣と海苔が有名ですから、処理場が稼働すると、処理水が浜名湖に流入し、淡水化と赤潮による被害が発生する可能性もあるとして地元の漁業組合が大反対していたのです。岡村さんは、TVA（*テネシー川流域開発公社：アメリカの公営企業体で、一九三三年五月、ニューディール政策の一環として設立）の調査で、漁業組合の方々との共同作戦の一環として、アメリカではダム建設、植林、治水事業などが環境汚染とどう闘っているかを調べるために、漁師の支援を受けて何回もハーバードの私のところに来られました。

その後、早稲田大学人間科学部創設にあたり、日本最初のバイオエシックス講座担当教授に私

が就任した頃、岡村さんはお母さんたちや看護婦さんたちと小さな勉強会を始めていました。東京・武蔵野、自由が丘、名古屋、京都で、いろんなグループがあったのです。普段からお母さん方は、ニュースを見て子どもたちから聞かれてもきちんと答えられない。質問に正しく答えられない方法はないかと考えた時、やっぱり、第一線で働いている人から直接話を聞いたほうがいいという結論で岡村さんをお願いすることになったのだそうです。私も招かれて、何回かそのゼミに参加したことがあります。

難しい文章『ホスピスへの遠い道』

皆さん方の手元に資料が用意してあります。この資料は、『岡村昭彦集』全六巻（筑摩書房、一九八七年刊）の第六巻に私が書いた「補遺『ホスピスへの遠い道』からの出発」のコピーです。補遺というのは補うという意味です。補い支えるという意味です。『ホスピスへの遠い道』は、岡村さんが何を言おうとしているのかよく分からないという人もおられるようです。岡村さんはスケールが大きい人ですから、話が大きなので、混乱してしまいますよね。それで、私はそれにヒントを与える解説を、と思って書きました。

岡村さんについて、インターネットなどで情報を得ようとすると、前半はベトナム報道でアメリカ記者クラブ賞を取り、日本でも文部大臣賞を受賞し、岩波書店の『南ヴェトナム戦争従軍記』はベストセラーになった、と書いてあって、後半は、ホスピスを始めとして命の問題に取り組んだと書いてあります。

この、岡村さんがなぜホスピスや命の問題に取り組むようになったかという答えが、皆さんにお配りしているペーパーの中にあります。大変うれしいことに、この岡村昭彦集第六巻は、後に『定本 ホスピスへの遠い道―現代ホスピスのバックグラウンドを知るために』（*春秋社、一九九九年刊）というタイトルで出版されています。この『定本』には残念ながら、私の補遺と、評論家の岡部伊都子さんの解題が抜けています。

新版の序文を書いた山崎章郎先生が「私はこの本を初めて手に取って読む気がしなくてほっぽり出した」と書いておられて、ゆっくり読まないと分からないことが書いてあるのです。ぜひともじっくり読んでももらいたいと思っていますが、今日は要約して説明します。

私がこの補遺に何を書いたかというと、「岡村昭彦は『ひらめき』の人だった」ということです。岡村さんという人は、油断しないで、一瞬

一瞬を自分なりに突き止めて、そしてそれをひらめきの中で捉え直した人です。ひらめきは突如として起こります。私もたまにひらめきことはありますけども、それを実行するところまで行かないのです。



「ひらめき」、これが重要なキーワードです。ひらめくとは言っても、私たち、油断して人生を送っていると、ひらめかないうちに死んでし

まいます。ひらめきはとても大事なのです。「自分で丹念に集めた膨大な資料の山の中から、また時に人々との一寸した語り合いの中から、今自分が手がけているテーマに関わりがあると思われる微かな手掛かりを見つけ出すと、その事実関係を確かめるためにすぐ現場へと向かった」。

すごいことです。何しろいつでも突然電話がかかってくるのですから。暮れも正月も関係なく、「ああ、木村君ね。ちょっと大変だけれども、セント・エリザベス病院に予約取ってくれない？」って。

その当時、アメリカに電話かけるって大変な時代ですよ。料金は高いし、音は良く聞こえないし。今みたいにネットやメールがある時代ではないのですから。だから、私は困って、次こう書いています。

「浜名湖のほとりにある舞阪の彼の自宅からアーリントンのわが家に国際電話が入ったのは、一九八二年十二月二十日のことだった。丁度、クリスマスをはかえ、日本とは対照的にアメリカの社会生活のリズムがゆっくりと年末に向けて機能を一時停止するかのようなシーズンであった」。アメリカではクリスマス頃から、どこもお休みになりますからね。日本では十二月三十一日まで仕事ですけどね。

「相変わらずの元気な声がエコーして太平洋を越えて伝わってくる。『あのなア、四月から連載のことだ』。これは何かというと、医学書院から刊行されている看護学雑誌の連載のことです。」

「明後日そっちにいくから、例のセント・エリザベス病院の訪問のアレンジを頼むよ。セント・エリザベス病院がどういう所か、つてきちんと調べて」。先ほど申し上げましたが、今はほとんどいなくなりましたが、当時、数千人のアメリカの帰還兵を収容していました。「それから誰か重要なスタッフにインタビューしたいのだけどそのアレンジもよろしく。あとはそっちに行ってから詳しく……」 っていうことで電話が来たわけです。

全くタイミングが良くないのです。家内も子どももいますし、アメリカ社会全体が動かなくなっているのですからね。だけど、岡村さんはもう決めてしまっているのです。私としては、ともかく私の友人を含む何人かを紹介することになりました。岡村さんは「そのセント・エリザベス病院にもきつと患者の権利宣言の文章があって、壁にでも掲げてあるのではないのかなあ」 っていうのです。多分、見えているのですね、ひらめきで。



「正に彼の『ひらめき』の『イメージ』は当たっていた。驚いたことに、病院を訪問してみると丁度ポスターの大きさに印刷した患者の権利宣言が壁に掲げてあったのだ。彼はこのポスターを二十枚ばかりいただだけませんかと申し出て、インタビューの相手となった患者の権利擁護委員のヘーゼルさんを驚かせたものだった。」

このような『ひらめき』は、彼の記憶力の良さとも関係があるようだ。実は、以前私がハーバード大学にいた頃、腎臓結石で入院したことがあった。その時手渡された入院案内等の入った袋の中に『マウント・オーバン病院・患者の権利憲章』のパンフレットがあり、その全文が病院の玄関に近い壁に額に入れられ掲げてあったことを彼に話したことがあったのだ。

岡村さんはこういうことを詳細にわたって覚えていてのですね。すごい記憶力です。だから、ワシントンDCのこのセント・エリザベス病院にもこういうものがあるに違いない、と「ひらめいた」。すごいひらめきの人ですね。

『自分の都合の良い時に、自分の都合の良いやり方で、自分のやりたい仕事をする』というのがフリーのジャーナリストとしての彼の信条でもあった。このような意味で『ホスピスへの遠い道』は、彼の全身全霊を燃焼させるのにふさわしく、彼が一番書きたいテーマであった。従って、それを最も彼らしいやり方で国の内外に取材を続け、彼の生活、体験、知識の全てを注ぎ込んでいったのだった。

皆さんはゆっくりお読みになると分かりますが、彼は生活の中の、展開として患者の権利を捉えたのです。セント・エリザベス病院そのもの

のからだんだん大きく広がって、かつて、入院患者だったエズラ・パウンドという二十世紀最大の詩人とされる世界的に有名だった「患者」の著作まで登場して、本当に自由な書きぶりになっているのです。

「現在取り組んでいるテーマについて、彼自身が重要であると考える人の著作や資料からの引用と抜粋とそれへのコメントがある。ついでその具体的事実や状況の理解のための準備、読書、資料の分析と行動が開始される」。分かりますか？「ルポルタージュとしての臨場感をもって、彼の手にかかった素材はいきいきと動き出し、生命を与えられる。このようなプロセスの中で、新しい事実や人々との出会いと発見が記憶にとどめられる」。いいですか。これから先が大事。

「多くの場合、彼はそれを頭に叩き込み、ビジュアルにイメージとして把握し、メモをとることを嫌った。ノートも、筆記用具も、テープも持たずに全てをディテイルに至るまで克明に覚え込むこの方式だったからこそ、インタビューを受けた人々も構えることなく安心して胸の内をみせてくれることが多かったのだろう。そして、取材した相手の話の重点は勿論、その言葉の使いかた、アクセント、語り口、身振りなどを後で何回もくり返せるほどに彼は一

瞬の内に把握してしまうようだった。これはすごい才能ですよ。こういう人ってなかなかいない。私も人に会う時には、メモしたりせざるを得ないです。岡村さんはそれを全部覚えてしまうのです。

岡村さんとバイオエシックスの出会い

「それは、一九八〇年一月のことだった。当時ハーバード大学にいた私を訪ねた彼は、『今、何を研究しているの？』と極めて直裁に尋ねた。私は、一九七八年に刊行された『バイオエシックス大百科事典』の四巻本の一冊を手にしたがら、私が数年来取り組んできているこの新しいバイオエシックスという学問分野の内容を彼に説明したのをはっきり覚えている」。

Googleを始め、いろんなマスメディアの情報などでも、岡村さんがベトナムからバイオエシックスに入っていくプロセスはほとんど書いてありません。材料がない、知るすべがないからです。もちろん、岡村さんは自分では言っていますけど、『私が詳しく解説したバイオエシックス自体の学問内容や理論には大して関心を示さず、むしろバイオエシックスを生み出すに至った米国社会の一九五〇年代後半からの『人権運動』に焦点を合わせた私独自の分析に熱心に聞

き入ってくれた。また当時、私の属していた『人々のための科学グループ』(Science for the Peopleという)による遺伝子組み替え実験反対運動に興味を抱いたようだった」と私は、書いています。

当時、ハーバード・メデイカル・スクールにいたジョナサン・ベックウィスという、人間の遺伝子を同定してノーベル賞を受賞する寸前までいった遺伝子学者がいて、その人がこのScience for the Peopleを展開していたのです。

「ベトナム反戦運動とも取り組んできたこのグループの刊行物は、環境汚染、枯葉剤の使用によるベトナムでの奇形児の出生や流産の問題、遺伝子操作の問題等を集めていた。バイオエシックスとベトナムの交錯に彼は『ひらめき』を感じたのだ。この時を境に彼自身(それまでに取り組んできたテーマを統合する形での)バイオエシックスへの『思い入れ』がはじまった」。これが彼のバイオエシックスの出发点。これが歴史的事実です。

そうして別れ際に、空港で熱心に岡村さんは私に言ったのです。『君にはそのバイオエシックスを日本に伝える責任があるよ。僕も手伝うから一時帰国して講演をきなさい』と、何回も口説かれました。

その後、「これが具体化して、一九八〇年四月

初旬から五月にかけてほぼ毎日、北は北海道から南は九州まで、日本各地でバイオエシックスについての講演旅行を彼と二人で行いました。

日本医師会はもちろんのこと、大学医学部、病院、研究所、消費者グループ、キリスト教関係団体等々（教会、YMCA、YWCAなど）、全国各地にグラスルーツレベルで『バイオエシックス』という言葉とその学問内容を広める手がかりをつくることができました。

そうして、「日本でのバイオエシックスの展開が厚生、保健行政担当官公庁や生命医学の専門家たちだけのイニシアティブによるだけでなく、一般の人々が『自分の命は自分で守る』ことの自覚からはじまるべきだとする私のバイオエシックスの考えに全面的に賛同した彼自身は、その後、学習心にもえた人々を中心にバイオエシックス・セミナーを組織しはじめた。これらのゼミのいきいきとした描写と展開の一部はこの『ホスピスへの遠い道』の中に彼自身によって記録されている」。

このような展開は、四十年を経て、方向が見えている人にはますます見えてきます。岡村さんが始めたのは、医療関係者、特に看護の人たちを中心にした患者との新しいネットワーク。そして、患者を中心にした看護師とのネットワーク。また、医師会の中でも非常に良識とされ

る方々とのネットワーク。そういう展開が未来に向けて重要だったということが、現在はずきりと見えて来ています。

次に挙げるのは一九八〇年当時、日本のバイオエシックスの展開について、私がアドバイスし、岡村さんと二人で討議し、構想したバイオエシックスの主な「未来構想」でした。

「日本でのバイオエシックスの展開のための基本の考え方についてのメモ

1、医療における患者中心思想の展開。
2、医療の現場の人々との対話と交流。

特に看護教育へのバイオエシックスの導入と看護教育における一般教育教科の充実。

3、一般の人々の間に、バイオエシックス理解のための学習を勧める。

4、既成の教育機関やシステムによらない新しい組織体や方法による継続的なバイオエシックス学習ネットワークの形成と展開。

5、バイオエシックスのボランティアによる実践活動の組織化。

6、東洋医学の臨床や思想のバイオエシックス理論への導入。

7、コミュニティの中でのバイオエシックスの実践活動の意味とその方法」

「患者の人権、医の倫理」

さて、四十年後の今、どうでしょうか。ある意味でバイオエシックスが大きく展開されてきたけども、一方で専門家の間に「専門のことを知らない部外者が何を言うのか」という「新しいパターナリズム」傾向が再び出てきている、と指摘する人もあります。

私は厚生省から委嘱され医師国家試験の委員として（出題基準は公開されていますので言うて差し支えないのです）、「患者の人権、医の倫理」を必ず入れるように提言したのです。いま厚生省の医師国家試験を始め、いろんな部門でバイオエシックス的な考え方が導入され、「患者中心の医療の発想」や「患者の権利運動」など医療における大きな変化が患者や患者家族や一般市民のイニシアティブで起こりました。しかし、一方でまだまだ「インフォームドコンセント」の理解不足などにより、全体的な、大きな流れとしての「患者の人間としての尊厳」をふまえて展開されてきたバイオエシックスの理念が、日本では十分に生きているとは言えません。

岡村さんが亡くなってから、バイオエシックスの分野は多様な展開がなされました。一番大きな展開の一つとして、皆さんにぜひ読んで

raitai shokan ni, shokan chikun-san to komatsu takahiko-san no hensei yori 『生命倫理の源流―戦後日本社会とバイオエシックス』(岩波書店、二〇一四年刊) という本があります。この厚い本を読んだ方はどれくらいいらつしやいますか？

この本の編集者は日本生命倫理学会の学会員のお二人ですが、これは絶対に必読です。バイオエシックスを学び、実践しようとしたら絶対に読まなくてはいけない本です。

それからもう一冊、これは高草木光一さんという慶應義塾大学の先生がお書きになった『岡村昭彦と死の思想―「いのち」を語り継ぐ場としてのホスピス』(*岩波書店、二〇一六年刊)。二冊とも岩波です。これを読んだ方はいらつしやいますよね。戦後のバイオエシックスは一体どういうふうに始まって、それがどうなっているかということが、とてもユニークな岡村さんの生き方と重ねて、わかり易く書いてあります。これから皆さんが、患者として、医師として、看護師として、また家族や関係者として、自分のビオス(いのち)を守り、それを自分で育てるために、また、バイオエシックスを広めていくためには必読の本です。まだ岡村さんについて知らないことがいっぱいあります。でも、少しずついろんなことが分かってきました。この本は、それをどう理解するか「鍵」になる本

です。

この二冊は図書館にはあると思いますから、買う必要はありません。図書館で探して、ない時には図書館に買わせる、これが岡村さんのやり方です。



誰がどんなことを言っても、岡村さんのアイデア、考え方というのは三〇〇年は消えないで

しよう。誰かが必ず掘り起こして探しだすからです。

ところで、私はベトナムで腎臓結石を発病して、東京に一時帰国し、羽田空港近隣の大学病院で手術を受けました。これはもうひどかったですよ。一九七二年のことでしたが、当時は携帯電話もなく、あらかじめ連絡済みの病院に電話をかけると、緊急手術するほどのことはないということ、夜はレントゲンを撮っただけで寝て、翌朝、レントゲン写真を見ながら医師が診察室の中にいる学生に、「こういう場合、どうしたらいい？」と聞きました。すると学生が「全身麻酔で結石摘出です」。すると「君、よく分かるね。それしかないよね」という感じの一応の診断で、短い時間で診察が終わりました。「手術後は、とにかく二週間、横になってください。場合によっては、快復後、再びサイゴンに帰任していいという証明書を出します」と言われました。この体験が私自身の患者体験の原点です。

だいぶ後になって、腎臓関連の学会で、かつて、僕の手術をしたと同じ大学の泌尿器科の医師と会った時、「僕の担当の先生は、僕の結石摘出のため、背部の左側の位置から切開したのですよ」と私が言いましたら、「ああ、木村さん、それはね、当時のいわば、実験的処置でした」

って言われたのでした。当時の左脇腹から筋肉の切開手術よりも背中から切開したほうが結石を取り出しやすいと考えられていたのでしょうか。医師は「当時の実験的処置です」と明言しました。現在なら、そのような場合には、医療側は「こういう処置をしますけど、あなたはどう思いますか」と全部詳細に説明しなければならぬのです。診断の結果も、結石がどこにあつてどうなっているのかを正しく告げなくてはいいないのです。

私は一九七九年にハーバード大学で、腎臓結石が再発して手術を受けました。そこで日本とアメリカの違いに愕然としました。ハーバードでの手術の当時、タンクの中に身体を沈めて外から超音波で刺激を加えて石を砕く方法もあると言われました。治療には選択肢があります。それから、リスクも患者に告げなくてはなりません。治らない場合、手術しない場合どうなるかも含めて、分かりやすい言葉で説明して、患者が納得し、同意したかを確認しなくてはいいないのです。ハーバードでは、それを確認するための、「患者の権利担当スタッフ」(Patient Rights Officer)もそばにいて、一緒に聞いてくれました。私は日本とアメリカと双方の国で手術を受けたので、違いがわかりました。そういう自分自身の患者体験を踏まえて、私はどう

しても患者としての権利を正しく主張し、発言すべきだという思いがあつて、岡村さんと一緒に活動を開始したのでした。



鈴木利廣さんという医事訴訟関係の弁護士さんは、「乾(成夫)氏からは、当時木村利人氏と岡村昭彦氏がバイオエシックス・患者の権利に関する講演を全国的に開催していることを教え

られ、この講演会の追っかけ(わずか十日間に四度の講演会参加)をすることになった。人権運動を基盤にした超学際的な木村利人流バイオエシックスに魅せられた瞬間であつた。医療における医師と患者の関係性から、大人と子ども、男と女と家族、健常者と障がい者、弁護士と依頼者、司法と市民、様々な人間的コミュニケーションや近未来社会のあり方に思考は飛び、自らの生き方をも問い始めることになった。37歳にして、人生のターニングポイントであつた。

医療と人権を基盤に、さまざまな強者・弱者の関係の中における弱者の権利宣言にも関心が広がり、そこでの学びを医療と人権に反映させる循環的思考、更には弁護士実務のみならず、研究・教育や、政策・運動の分野にも実践を広げることの重要性を学んだ」と御著書「損害賠償訴訟と弁護士の使命…医事関係訴訟を素材に」(日本評論社、二〇二三年刊)の中で書いておられます。

岡村さんと私の講義を聞いて、受講された方々が驚いたのはどこかというと、二人が皆さん方の前に座り、岡村さんは岡村さんのアピールをし、私は私のアピールをすることであつたようです。それまでの日本では、誰か一人の偉い先生が話して、質疑応答で終わるというパターンでした。岡村さんが私の話に対して

「いや、木村君ね、そう言ってもね」と反論できるようなスタイルのレクチャーでした。ハーバードでは経験していましたが、日本では私たちが初めて行った講義方式だったのです。

メッセージは「平和」

このように、バイオエシックスの展開を二人で一緒に行っていくうちに、岡村さん自身のバイオエシックスの構想が固まってくるのです。

岡村さんが亡くなったのは一九八五年で、私は一九八七年から早稲田大学のバイオエシックス担当講座の教授になります。岡村さんが亡くなって三年たって、本日もお見えになっている大林雅之先生など多くの先生方のご尽力もあって、学問的なバイオエシックスの構想が形成されるようになり、一九八八年十一月に日本生命倫理学会も発足しました。

今日の講演には「岡村さんのメッセージは何か」と副題をつけましたが、メッセージははっきりしているのです。「平和」です。バイオエシックスの到達へのメッセージ、その最終地点は平和です。いま世界が直面している危機的状況の中で、日本は比較的静かです。ウクライナとロシアの戦争、イスラエルとハマスの戦いについて、アメリカではバイオエシックスの研究者

も漸く発言し始めました。

私は二〇〇六年に岡山大学で開催された日本生命倫理学会学術大会のシンポジウムで、「戦争とテロに抗するバイオエシックス」というテーマで報告し、それが学会誌に掲載されています（生命倫理…第十七巻第一号）。このような観点から、これからまだまだ岡村さんのメッセージである平和を中心にバイオエシックスを展開していく責任を私たちは担っていると思うのです。

最後にお話したいのは、私が一九五九年に、YMCA国際ワークキャンプに参加した時の体験です。この時、日本からはただ一人の参加でした。戦争が終わってたった十四年でした。私は、子どもの時の教育で、日本は大東亜戦争で植民地の国々のために戦って、それらの国々が独立するよう助けているというスローガンを感じ込まれて育ちました。フィリピンに行って驚いたのは、私の行ったワークキャンプの場所は、真珠湾攻撃の約二週間あと、寺内南方軍総司令官の下で日本軍が大挙して上陸用舟艇で侵攻し、アメリカ・フィリピン連合軍と戦ったリングエン海岸という場所だったのです。知らなかったとはいえ本当に恥ずかしいというか、身の縮む思いをしました。

ここでは公衆衛生活動の一環として、現地の

人たちと、環境保全のためのいろんな仕事をしました。トイレの穴掘をしたりして大変でした。そこが、かつて日本軍によってキャンプ参加者のご家族の方が殺されたところだったのです。日本人が民間人を教会に閉じ込めて、外から火を付けて、出てくる人々を機関銃で撃ったという場所があるのですから。私はもう身の置き場がないのです。あとで、私がとても仲良くなったラルフ君という友人には「日本人が来たら誰でもいいから殺したいと思っていたのだよ」と言われました。

彼とは一番仲良くなって、「リヒト、君がここに来て、われわれの仲間、家族を殺したわけではない。君は小さい子どもで、その時お寺にいたのだよね。だから、これから命を大事にして、本当に絶対に戦争をしないという誓いをして、お互いに友情を紡いでいこうね」と言ってくれたのです。ラルフ君とは握手して、抱き合って、涙を流しました。

許せない人を許すというのは大変です。今、私は思っているのですけども、ロシアとウクライナ、イスラエルとハマスの、やがて平和を到来させ、戦争が終わり、お互いに涙を流しあって、平和を喜ぶ時が来るようにと願っています。

私は日本軍が東南アジア・フィリピンの人たちを助けるために正義の戦争をしているとばつ

かり思っていたのです。フィリピンで死んだ日本の兵士は五〇万人。フィリピン人は民間人を入れて一〇〇万人。このような事実は全く知りませんでした。

この国際ワークキャンプで、私たちが一緒に寝泊まりしていた小学校の校庭で、フィリピンの子どもたちが歌っていた地元の民謡曲のメロディーに私が、日本語で詞をつけたのが、ご存じの方もいらっしゃると思います。『幸せなら手をたたこう』という歌です。この歌のルーツは、今お話ししましたように、「戦争の悲しみと憎しみをこえた愛と平和」の歌なのです。

『すべての人々よ 手をたたこう』という「旧約聖書・詩篇」にヒントを得て、平和の「幸せ」を守っていこう、どんなことがあっても、再び武器を取って戦わないようにしようと誓い合ったのでした。

最後に、私は四つのメッセージをもって今日の私の話を終わりたいと思います。

それは「グローバル・シチズン」、地球市民として、これから生きていく中で「それは知らなかった」では済まされることがあるということです。

フィリピンに行つて、「ここに日本軍が来て攻め入つて、そして地元の村人が多数殺された」

「ああ、そうですか。知りませんでした」では済まされない、恥ずかしいことです。

海岸には日本軍の上陸用舟艇の残骸があり、海岸に面している市の庁舎には砲弾の大きな穴の跡がまだ残っていました。戦後十四年、どれだけ日本人を憎んでいたか。にもかかわらず、戦後初めて日本人を快く受け入れてくれた、ということに対する幸せと感謝の歌なのです、あの『幸せなら手をたたこう』の歌は。

知らないことは本当に恥ずかしい。「しあわせ」の「し」は知らないこと、無知への反省です。それが「しあわせ」の「し」。

「しあわせ」の「あ」は、どんなに憎んだ敵でも赦しお互いに愛し合ひましょうの「あ」です。「しあわせ」の「わ」は、和（輪）を作ります。平和を作りましょうという願いを込めた「わ」です。

それは平和の「和」であると同時にネットワークの「輪」、サークルの輪です。フィリピンでの友人の一人で今でもつながっているレイ・コレオス君という友人がいます。彼は九一歳。現在はカリフォルニアに住んでいます。私も九一歳ですので、これからも、まだまだこの「輪」をつなげ続けて生きていきたいと思っています。

そして最後の「せ」は、世界に目を注ぎ「せ」です。

日本は今でも鎖国状態です。正しい情報が伝わってこない。報道の自由度ランキングがありますが、二〇二四年には、日本は世界で七〇位に転落しました。公正な意見が伝わらない。付度社会ですから。岡村さんの時代からもっと悪くなつていて、都合の悪い記事は「付度」して報道しないような馴れ合いのジャーナリズムになっています。

『幸せなら手をたたこう』の歌のルーツは反戦・平和です。結婚式や誕生日のパーティーや、楽しく、愉快で、明るく、元気に、子どもたちも、おじいさんもおばさんも誰でも、それぞれ自分が詞を作つて歌える楽しい歌だと思ひしかし、私はいつもこの歌の原点としての、知ること、愛すること、和（輪）をつくること、そして世界に広めていくことを意識して「し・あ・わ・せ」を歌つて欲しいと思っています。

地球市民として生きていくために国連SDGs（持続可能な開発目標）、十七の到達目標がありますけども、三番目に「Health and Wellfare for all」（すべての人に健康と福祉を）という目標があります。市民による新しい自分の命を守り育てるアイデアを世界的に影響を与える形で大胆に作り出していきましょう。

今日、ここにおられる栗原千絵子さんは、世界医師会ヘルシンキ宣言（2024年改訂）の

草案作成協力者のお一人で、日本国内だけでなく国際的にも活動しておられます。

これは岡村さんの一般の人々中心の考え方の展開でもあります。それぞれの皆さん方が、さまざまな場所で、権威や力や強制によるのではなく、自発的につながり合って、これまでの制度化された教育のシステムと違った形での新しい人権のサポートシステムと教育活動を作り上げていくべき時がきています。

岡村さんは、日本で最初にそのような互いに支え合う「いのち」の教育と「バイオエシックスの実践活動」を日本の各地をつなげて展開した本場にユニークなパイオニアでした。

私たちは、岡村さんが語られ、実践されたようにこれからの三〇〇年を目指して、「人間の尊厳」を守り育て、未来の平和を作り出すために、共に力をあわせつつ進んでいこうではありませんか。本日はどうもありがとうございました。

（質疑応答はページ数の都合で省略します）

比留間 木村先生には岡村昭彦の思想は三〇〇年続くという心強い、力強いメッセージをいただきました。素晴らしいご講演ありがとうございました。もう一度、盛大な拍手をお願いいたします。ありがとうございました。（拍手）

長女佐藤純子さんの挨拶



佐藤 今日はお集まりいただきありがとうございます。います。もう40年ということではびっくりしているのと、葬儀の時の映像を見て、いかにみんなが若かったかと思いました。父も若くして逝ってしまったのですけれども、木村利人先生には函館でもバイオエシックスの講演を父と一緒にしていたので、その時には父が『幸せなら手をたたこう』の詩を書いた人です。よっていいことで皆さんに紹介して、いくらかでも興味を持ってもらおうというので一生懸命でした。マンガの本は私も読みましたけど、とても読み易いので、どうぞ地元の本屋さんでお買い求めください。それから木村利人さんの奥さま木村恵子さんが翻訳してくださった『ホスピス』の本ですけれども、父がそれこそ函館の店で、買ってくださいました方に、「どういふ職業ですか」というように、丁寧にコメントを書いてサイン本をお渡ししたので覚えています。

また、木村先生がおっしゃっていたようにいろんなひらめきがすごいんです。けれども、ひらめきがいいほうに行く時があれば、ひらめきで迷惑をかける時が多々あります。それは私が謝ることではないんですけど、「申し訳ありませんでした」お許しいただければと思います。

それとついでこの間、千葉佐倉市の部落の出身の方からお便りを頂きまして、自分たちは昭彦さんを（その時父はヒゲを生やしていたみたいで）「ヒゲさん、ヒゲさん」と呼んでいて、自分たちはヒゲさんに助けられたと思っていますとおっしゃっていました。

佐倉はそんなに長い間はいなかったようですが、役所との交渉とか、住民の権利について知らないことが多くて、こういう支援が受けられるとか、ヒゲさんが役所と細かく掛け合ってくださって、自分たちは助けられたと思っています。と。ただ、父は佐倉ではいろんなことがあって、長く居られなくて、次の段階に行きます。

私は当時小さかったので、分からないこともいっぱいあったのですが、少しずつそういうお話をいただいて、最近になって、父は人の役に立ちたい、お一人お一人の気持ちの中に残っていたりしていることが実感できるようになりました。父に叱咤激励された人とか、批判された人、面白い言葉が言われた方もたくさんいらつしやると思いますが、それに負けないようにと頑張ってくださいている方がたくさんいらつしやるということを最近感じております。

本日はお越しいただきありがとうございました。

事務局からのお知らせ

1. アイルランド映画祭で岡村昭彦のドキュメンタリー映画『メモリーズ・オブ・アザーズ』上映



日本人写真家による北アイルランド紛争の傷痕

メモリーズ・オブ・アザーズ (短編) The Memories of Others

監督：マーク・レッサー、ボーリン・ヴェルマーレ
出演：トム・バーク、アンソニー・ホービー、木村利人
2024年 / 20分 / カラー (一部モノクロ)

■6月4日(水) 19:00 ■6月9日(月) 19:00 ※上映後、生演義あり

ベトナム戦争を撮影した報道写真で知られる日本の写真家・ジャーナリストの岡村昭彦が、北アイルランド紛争の渦中に撮影した、これまでほとんど知られていなかった作品の数々を明らかにする短編ドキュメンタリー。約15年間にわたって撮影し続けた岡村の写真やアーカイブ映像を通し、平和とは何か問いかける。

※『あるバブとの別れ』と併映。

マーク・レッサー&ボーリン・ヴェルマーレ共同監督から寄せられたメッセージ。

「私たちはこの短編映画『他者の記憶』を制作することで、岡村昭彦の並外れたアイルランドでの仕事に敬意を表し、彼を日本の外の写真界に紹介したいと考えました。彼の家族、友人、同僚、そして著名な写真史家たちへの親密なインタビューを通じて、私たちは日本とアイルランドを行き来しながら、彼の人生、仕事、そして遺産についての洞察に満ちた証言を集めていきました。

この素材自体が、深く心を動かされるものであり、また大きな刺激を与えてくれるものでした。しかし制作の

最終段階に近づくにつれ、何かが欠けていると感じ始めました。それは岡村自身の声でした。その欠けたピースが、思いがけず2024年1月31日に届きました。東京にある彼のアーカイブを管理している戸田昌子さんが、1984年にNHKで放送された岡村の長時間インタビューを共有してくださったのです。

彼の力強い言葉には、独自で重要な哲学が宿っていました。岡村は、アイルランドと日本との関係について、私たちが答えを見いだせずにいた問いに答えてくれたのです。情熱と信念に満ちた彼自身の語りを通して、私たちは映画にふさわしい結末を見いだすことができました——それは、希望、平和、そして世界に対する開かれた心への頌歌でした。

この映画、そして2024年に出版された同名の写真集(写真左)を通して、私たちは岡村の貴重な芸術的・人道的遺産に貢献したいと願っています。」(2025/06/28)



(アブレンティス・ボーイズのパレードで、裏切り者の人形を燃やす準備をする子どもたち。デリー、北アイルランド、1970年代)

2. 写真集『メモリーズ・オブ・アザーズ』好評販売中

アイルランド写真美術館での写真展に寄せて刊行された写真集が好評発売中です。ご希望の方は函館・栄文堂へ、郵便振替用紙を同封してお送りします。

7000円(送料別4200円)〒040-0053 函館市

末広町8-14 FAX 0138(27) 2331

電話 0138(22) 3419 (午前中にお願います)

Webアドレス eibundo@msb.ncv.ne.jp

3. 「没後のアキヒコ・オカムラ」資料編

写真展・講演会。資料展

2024年

7・28 岩手県一関図書館100周年記念講演会

「岡村昭彦の知の世界」知の源泉としての一関」講師 静岡県立大学名誉教授 小幡壮

2025年

6・30〜6・12、東京・恵比寿 YEBISU GARDEN CINEMAにて開催された「アイルランド映画祭 2025」で岡村昭彦の業績をたどるドキュメンタリー映画『メモリーズ・オブ・アザーズ』が6日と9日に上映された。

「岡村昭彦の会 会報」第35号 (2025.7.15)

発行 東京都江戸川区西小岩五十一-二十七

戸田方「岡村昭彦の会」事務局

TEL&FAX 03-3657-8380

口座番号「00100-6-615129」

加入者名「岡村昭彦の会」

*URL <http://www.akihiko-no-kai@kazekusa.jp>

*メールアドレス akihiko-no-kai@kazekusa.jp